国の自立を支える〝人づくり〟の基礎、教育支援に貢献したい

人材育成―それこそが、その国の抱える問題を根本的に解決する。こうした思いを持ち続ける小林美弥子さんは、人づくりの基礎となる〝教育〟を、より多くの人々に届けられるよう支援している。

イエメンでプロジェクトの対象となった小学校を視察する小林さん（中央）

「今アフリカでは4秒に一人、死んでいる」。この衝撃的なキャッチコピーと、お腹がふくれた赤ちゃんの写真が載った新聞広告を見たのは小学6年生のときでした。自分は平和な毎日を過ごしているのに、同じ地球上で一体何が起こっているのだろう―。幼い私は小学校の児童会活動を通じて募金や毛布を集めて送り、それで「アフリカの人々を救えた」と思っていたのです。

しかしアフリカの状況は一向に変わらず、「世界中からお金やモノが送られているはずなのに…」という疑問が生まれました。そして、ただお金やモノをあげるだけでは根本的な解決にならない。その国の人々が自分たちで何が必要かを考えて行動することで、初めて状況を変えられる。だから中長期的には、人を育てる〝教育〟がその国の自立に欠かせないのだと考えるようになりました。これをきっかけに開発途上国の教育支援に貢献したいという夢を持ち、大学では教育学を、大学院では教育援助政策を学んでJICAに就職しました。

これまでさまざまな部署に配属されましたが、幸運にも教育関連のプロジェクトに継続して携わることができました。特に印象的だったのは、バングラデシュ事務所で担当した「小学校理数科教育強化計画」です。これは、ただ黒板に教科書の内容を写して暗記させるだけの授業ではなく、もっと子どもたちの学習意欲を引き出せる教授方法を教員たちが身に付けられるよう支援するものでした。しかし当初は財政支援が主流で、教育省の担当者に能力開発の重要性を分かってもらえず、「欲しいのは人よりもお金」と言われたこともあり、胃が痛くなるような日々でした。でも、教育省の担当者に地方の小学校へ視察に足を運んでもらったり、日本での研修に参加してもらうなど、地道な努力を続けてきました。そうしたら、教育省の担当者に変化が生まれ、「人を育てることこそ、国の発展の根幹だと分かった」という言葉をもらえたんです。

今、バングラデシュのプロジェクト対象校を訪れると、教員たちが自ら工夫を重ね、ただ覚えさせるのではなく、子どもたちが自分で考えて答えを見つけようとする授業を行うようになっています。例えば、〝長方形〟といった図形について学ぶ授業。以前は、教員が黒板に定義を書いて示し、子どもたちはそれをノートに写すだけでした。しかし、今は違います。「この教室で長方形のモノを探してみましょう。どんなものがありますか？」と教員が質問を投げかけ、生徒たちが教室中を見回しながら、「黒板！」「机！」と答えを探していくのです。子どもたちの成績も卒業率も向上し、バングラデシュ政府や他の援助機関から高い評価を得ていることは、担当者としてうれしく感じます。

現在は人間開発部で、中東地域やアジア地域の基礎教育支援を担当しています。特に思い入れが強いのは、男女の就学格差が世界で最も大きな国の一つであるイエメンでの「女子教育向上計画」です。まずプロジェクトでは、母親にアプローチすることから始めました。小学校に通ったことがない母親たちは、「学校」に対して心理的距離があり、なかなか子どもを通わせようとはしません。でも彼女たちに裁縫教室や識字教室を実施したところ、こう言われました。「文字や数字を読めるようになって人間としての誇りを取り戻した。だから、どんなに大変でも子ども、特に娘を学校に行かせたい」。文字の読み書きが人間にとってどれだけ大きなことなのか、彼女たちから教えられました。

こうした案件の担当に加えて、横断的に教育課題の広報、戦略、研究に取り組むのも私の仕事です。具体的には、教育分野の国際会議での発表や、シンポジウムの企画など、日々の業務から生の情報を集めながら、それを整理・分析して国内外に発信しています。こういった活動を通じて、日本の皆さん、特に若い世代に途上国の教育の現状を伝え、彼らが途上国に関心を持つきっかけになればと思っています。

バングラデシュ事務所に勤務していた当時、小学校の授業内容の改善に向け、教育関係者とのワークショップに参加

JICA人間開発部
基礎教育グループ
基礎教育第一課
小林 美弥子
Kobayashi Miyako

大学院卒業後、1998年JICAに就職。青年海外協力隊事務局、社会開発協力部（当時）、バングラデシュ事務所、国際協力総合研修所（当時）、海外長期研修（UNESCO）を経て、2008年9月から現職。